日本貨幣図鑑

郡司勇夫編

東洋経済新報社

日本貨幣図鑑

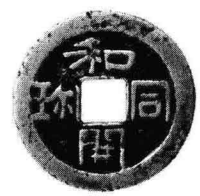
郡司勇夫編

東洋経済新報社

日本貨幣図鑑　定価 18000 円

発行日	昭和56年10月15日
編　者	郡司　勇夫
発行者	中井　義行
発行所	東洋経済新報社 東京都中央区日本橋本石町1-4 郵便番号　103 電話 03(270)4111(大代表) 振替口座　東京3-6518
印刷所	凸版印刷株式会社

©1981　Printed in Japan　2033-0155-5214



日本貨幣図鑑

和同開珎に始まる
1300年の貨幣の歴史を
ここに再現

推薦のことば

日本銀行金融研究局長　江口　英一

郡司勇夫氏編纂の『日本貨幣図鑑』が出版されることとなった。

編者の郡司氏は，昭和5年，貨幣研究家故田中啓文氏（銭幣館主，当時わが国随一の貨幣収集家）に師事されてより50年余，うち後半30余年は日本銀行において，終始貨幣および貨幣史の研究に携わってこられた。昨年古稀を迎えられたが，貨幣研究にかけるその情熱は衰えを知らず，日本銀行金融研究局と東京大学経済学部にそれぞれ週2回出向き，貨幣標本の鑑定・整理や貨幣史の研究に当たっておられるほか，日本貨幣協会副会長としても活躍中である。

この長い研究過程で，数多くの収集家・学者との交流のうちに編者の主張として浮かび上がってきたものは，“貨幣研究は貨幣現物の外観・形態の研究のみに留まってはならず，他方，歴史研究も古記録の祖述に捉われて現物の検証を怠るようなものであってはならない”ということである。たしかに，実物史料に最大の関心をもつ貨幣収集家と文書史料を重視する歴史研究者との間にはかなりの隔りがあったのは事実であろう。この点に着目した編者は，両者が有機的に連携し，その研究成果を相互に補完し合うことによって，すぐれた貨幣史研究がはじめて可能になるとして，自らそのパイプ役を果たしてこられたのである。

貨幣は交換経済の重要な担い手であり，人間が社会経済生活を営む上で発明した最も偉大な道具の一つといわれている。その素材・文様・製造技術，さらに分布（古貨幣にあっては出土品の分布）・利用状況・制度等の歴史的変遷の組織的検討は，時代時代の社会経済の営みの重要な一角に光を照らす。それは文書史料を補完し，あるいは記録を欠く史実の究明にも及びうる。近年，経済史研究にあたりこのような貨幣現物による検証の有効性の認識が高まり，また貨幣収集の面でも歴史的記録との関係を吟味しようとの傾向が強まってきたが，これは編者の長年の努力の成果といってもよいだろう。

また，たとえば，わが国では古代律令国家成立とともに「和同開珎」以下のいわゆる「皇朝銭」が鋳造され，かなりの程度まで交換手段として機能したこと，それにもかかわらず平安時代後期から室町時代までは国内での貨幣鋳造は一切行なわれず，中国などからの渡来銭が交換手段・計算単位として機能しつつ貨幣経済浸透の担い手となってきたこと，一方，西

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

欧よりも古くかつ健全な紙幣（山田羽書――17世紀初頭から明治まで存続）の歴史をもっていること，等々，わが国の貨幣（マネー）の生成発展の中には味わうべきことが多い。かつて，著名な理論経済学者J.R.ヒックスは，貨幣（マネー）そのものが時代から時代へと歴史的進化を遂げてきたことに注目し，貨幣理論（マネタリー・セオリー）は他の経済理論に比べて抽象度が低いはずであるとして，経済メカニズムにおける貨幣（マネー）の役割を16世紀に遡る西欧貨幣史（マネタリー・エクスピリアンス）の史実の中から探ろうとした。同じような意味で，日本の貨幣史も貨幣理論（マネタリー・セオリー）の研究者に対して重要かつ興味深い素材を提供するものであろう。

本書は，貨幣・紙幣の現物を主体として編纂された収集家向けの図鑑の形をとっているが，上述のような編者のかねての持論に基づいて，単に外観的・形態的な側面に留まらず，経済史的，流通史的な側面をも多分に加味したものとなっており，この種の書物としては他に類例をみないもののように思われる。

本書に収録されている図版1270点は，日本銀行調査局編『図録 日本の貨幣』（全11巻，昭和47～51年，東洋経済新報社 刊行）に掲載されたものから選定されたものであるが，これらの貨幣・紙幣のほとんどすべては日本銀行所蔵のものである。日本銀行の貨幣コレクションは，文化財的価値に富むものを多数含んでおり，質量ともにわが国随一といわれ，世界的にも高く評価されている。こうしたコレクションの主要部分とその文化的意味が，本書のようなかたちで広く一般の利用に供せられることは欣びに堪えない。貨幣そのものに興味を持つ方にはもちろんのこと，わが国の貨幣に関する歴史的な素養を求めている方々など，広く江湖に本書を推薦する次第である。

昭和56年7月

本書の刊行によせて

創価大学教授　山口　和雄

私と郡司勇夫さんとは，かつて日本銀行調査局編『図録 日本の貨幣』を一緒にやった間柄であり，また日頃古貨幣や貨幣史についていろいろとお教えをいただいている関係にある。この『日本貨幣図鑑』は，郡司さんが永年勤務した日本銀行調査局（現在は金融研究局）によって編纂された上述の『図録』を母胎としていると思うので，最初に，それの作成に当たっての郡司さんの役割について少しく述べることにしたい。

『図録 日本の貨幣』は全部で11巻に及ぶ大著で，昭和47年(1972)から51年(1976)にかけて，やはり東洋経済新報社から刊行された。第1巻は原始時代・古代・中世に，第2巻から第6巻までは近世に，第7巻から第11巻までは近現代にあてられ，各巻とも前半に貨幣図版とその解説を収め，後半にそれぞれの時期の貨幣史を記している（第11巻のみ貨幣史に代わり索引・年表等を収める）。図版として収録された貨幣は，日本銀行所蔵のものを主体とし，それに足りないものを外部から補い，その数4300余点に及ぶ。したがって，それぞれの時期に発行または流通した貨幣のほとんどすべてが網羅されているといってよい。この図版の選定と解説の執筆を各巻にわたって担当されたのが郡司さんである。これは，古貨幣の大ベテランである郡司さんでなくてはできない仕事であった。

ところで，現在日本銀行が所蔵している貨幣コレクションは，戦前に東京の実業家で熱心な古貨幣の蒐集家であり，研究家でもあった田中啓文という方が，ほとんど一生涯をかけて蒐集し，それを邸内に設けた銭幣館と呼ぶ建物に保存されていたものが基になっており，それをその後さらに補充したものである。銭幣館に蒐集された貨幣は，日本を中心に中国・韓国・東南アジア各地等のもので，その数約10万点に及ぶ。それに貨幣関係の用具類・古泉文献・貨幣関係の古文書類・古地図などが付加されており，この種のコレクションとしては最高のものである。

日本銀行は，太平洋戦争末期の昭和19年(1944)の末，時の渋沢敬三総裁の発意で田中啓文氏からこのコレクションを譲り受けることをきめ，その寄贈を受けた。民俗学・社会経済史にも深い関心を有していた渋沢総裁は，かねてからこのコレクションの文化的価値を高く評価していたので，田中氏からの寄贈の申し出のあったのを機に，これを譲り受け，日本銀行

の地下室に保管した。こうして，この貴重な文化財は戦火や海外持ち出しの危険からまぬがれることができたのである。

編者の郡司さんは，青年期からこの銭幣館にあって，田中啓文氏の指導のもとに，古貨幣の蒐集とその調査研究に当たられた人である。そして，このコレクションが日本銀行に移った時に実物とともに日本銀行に入られた。それは，コレクションは単に物だけでは駄目で，それを整理し研究する人が必要だ，との渋沢総裁の考えによると聞いている。爾来30年，郡司さんは日本銀行にあって，このコレクションの整備研究と補充にはげまれた。そして今日では，古貨幣界の分野では余人をもって代えがたい第一人者である。

日本銀行編の『図録 日本の貨幣』は，さきにも述べたように，全11巻に及ぶ大部の豪華本で，値段も全部では相当高価になることもあって，一般の人々や若い研究者などはなかなか入手しにくい。そうしたことも配慮してか，郡司さんは出版元とはかり，新たに本書のような手頃の一冊の書物を編み，刊行されることとなったときく。この図鑑では『図録 日本の貨幣』掲載の図版4300余点の中からとくに重要とみられるもの1270点が選ばれ，利用の便を考えて「貨幣編」と「紙幣編」に分けた上で，すべて原色写真で表示されている。図版には，その一つ一つについて郡司さんの解説が記されている。それも，『図録』の経験を生かし，それをさらによくするための努力が払われたばかりでなく，新たに貨幣史的な説明が加えられている。

郡司さんの人となりと仕事の内容については大体以上のとおりであるが，これによってもわかるように，本書は，古貨幣の蒐集研究家にとってはもちろんのこと，日本の貨幣史を研究するものにとっても，有用で信頼に値する手頃の図鑑であるといえる。歴史家は，ともすると，史料として現物よりも文書記録類を重視する傾向があるが，しかし現物は文書記録類と並んで歴史を研究する上で重要な史料である。とくに貨幣史の研究にとっては，現物の貨幣は関係の文書記録類とともに，必要欠くべからざる重要な史料である。これについて，二，三，例をあげよう。

第一に，わが国最初の通貨とされている和同開珎の現物の中には，古銭界で「古和同銭」

といわれるものがある。これは通常の和同銭にくらべ，銭文の書体に古雅の味わいがみられ，製作も素朴でやや厚手の感じがあり，その数もそう多くない。こうした点から「古和同銭」は，和銅元年（708）以前に鋳造されたものではなかろうか，ともみられている。これは，もちろん文献資料の上からはあきらかでなく，現物に接してはじめて知られ得ることである。

第二に，江戸期の例を一つあげると，徳川幕府は幕末の万延元年(1860)，開港直後にわが金貨が大流出したのに対処するため，従来の天保小判や安政小判にくらべ3分の1しかない万延小判を鋳造・発行した。これはもちろん記録の上からもあきらかであるが，しかし実際に天保・安政両小判と万延小判の現物を比較してみて，はじめていかに万延小判が小さく貧弱であったか，また当時の経済情勢がいかに切迫していたかを生々しく感得できるのである。

さらにもう一つ例を近現代の中にさがしてみよう。日本銀行は，明治18年(1885)から日本銀行紙幣を発行したが，当時は銀本位制だったため，紙幣の標記は「日本銀行兌換銀券」であった。それが，明治30年(1897)からは「日本銀行兌換券」に変わった。それは同年に金本位制に移行したからである。さらに，昭和17年(1942)には管理通貨制度が採用されたため，紙幣面からも「兌換」の文字が消えて単に「日本銀行券」となり，今日に至っている。このように，日本銀行紙幣面の標記の変化がそのままその時代の通貨制度の変化を示しているのであって，ここにも現物に接することの重要さを示すよい例がみられるのである。

以上述べてきたところによって，貨幣史の研究者にとっても現物がきわめて重要であり，それを正確かつ歴史的な解説付でそのままの姿を表示している本図鑑は，貴重な研究資料を提供するものであることが知られるであろう。もちろん一般の人々で，わが国貨幣の移り変わりに興味をもつ方や，貨幣そのものを楽しもうとする趣味人，あるいは貨幣蒐集家にとっても，本書がまず手にすべき有用かつ信頼のおける図鑑であることは申すまでもない。

昭和56年7月

序　言

郡司　勇夫

私は日本銀行調査局の方々とともに，かつて『図録 日本の貨幣』という大著の編集に従事した。過去半世紀，内外の貨幣・紙幣の実物精査と併せて貨幣史を専門に学んできた私は，これに関連して筆をとることが少なくなかったが，オールカラーの図録編集というのはまったく初めてのことで，この方面の知識に乏しい私にとっては，またとない体験を持つことができた。したがって全11巻が予定通りの年月をもって完成した時の感激はひとしおで，その後長く余韻を残したものであった。刊行後外部からの反響や要望も予想以上のものがあり，時折の話のなかで『図録 日本の貨幣』を母胎とする，別の出版企画がきわめて自然な形で醸し出されるにいたったのである。

かくするうちに図録の第1回刊行から10年近い歳月が流れ，漸く機が熟し，今回『日本貨幣図鑑』という新しい構想が生まれることになった。すなわち『図録 日本の貨幣』は貨幣・紙幣の現物と強く結び付いた貨幣史であるが，なにぶん大部にわたり，各巻詳密な記述となっているから，これを要約し，コンパクトで手頃なものにして幅広い読者の要望に応えようという趣旨のもとに本図鑑を編むことになったのである。したがって本書の本文記述は『図録 日本の貨幣』の本文と図版解説とを織りなし，通貨の変遷と現物の特徴が理解され得るよう努めたつもりである。ただし本書は私個人の編述であり，また図録刊行後補正された部分もあって，図録の記述と一致しなかった部分のあることは当然のことであり，あらかじめ両書に接する方々のご理解を願わねばならない。

私は長年にわたり現存の現物史料の裏付けと通貨の流通過程を探究してきた関係から，文献史料の捜求に最も力を注いでいるが，常に史料の不足を慨嘆しつづけているものである。上代においては文字の普及が進まなかったことや貨幣流通がきわめて限られた小範囲にとどまったこと，中世においては為政者による正規の通貨政策が確立されていなかったこと，また近世以降は通貨発行当局の機密性や流通市場の状況を知るための民間記録が極端に乏しいこと，などがあって日本貨幣流通史の研究では限定された史料から矛盾撞着を避けての考証に少なからず腐心させられるのである。近世の経済史文献から間接的に流通状況を探るための挿話などは容易に求め得られるかの如くでありながら，解決できぬ障壁があまりに多く，

これは畢竟本邦にあっては永年にわたって根強く一般に滲み込んだ賤貨思想によるものではないかと考えているのである。殊に江戸中期以後地方通貨として重きをなしたと考えられる札遣いについては，それぞれの地域における流通の実態の書かれたものなど，多く遺存されていてよいはずであるが，通貨流通の側面をわずかに覗き得るのは江戸・京・大坂など札遣いのない地における記述にすぎない。

しかしながら貨幣を歴史的に究めることの貧しかった江戸時代元禄以降民間において，古貨幣を収集するという特殊な趣味が発生し，これら収集人を対象とした参考書が江戸・大坂・京都・名古屋などの地で刊行され，江戸末期には書物奉行近藤守重が幕府収蔵の古金銀貨幣を収録した『金銀図録』を刊行し，また草間直方はこれを他の貨幣にまで及ぼした経済史的記述で『三貨図彙』を編纂している。収集人のなかにも単に収集趣味の域にとどまらず，併せて貨幣関連の諸事項の調査研究に進む傾向を帯びるにいたり，特に明治以降は各地に研究を兼ねた同好団体が設立され，地味ながらも着実な進展をみせつつあった。しかし，その活動実態は一般に理解されず，弄銭趣味という低い評価を受けることが多かったようである。貨幣史研究は実物の実態を究めずして全きを得られるものではないから，これは不可解なことといわねばならず，欧米諸国においては貨幣現物の実証的研究に基礎をおいた学問的成果が大きく挙がっていることを思えば，反省がなされるべきであろう。このことについては『図録 日本の貨幣』第1巻の冒頭で当時の西川元彦調査局長が具体的に述べられている。

私は東洋貨幣研究所として開設された銭幣館に学び，そこで史学の世界から貨幣現物の世界へと積極的に入ってこられた遠藤佐々喜，西村真次，所三男，加藤繁，山崎覚次郎，土屋喬雄などの諸先生方から直接ご教導を受け，また戦後は小葉田淳，田谷博吉，中田易直，作道洋太郎の諸先生から大きな学恩を頂くことができ，この道が大きな進展に向かうなかにあって収集界と学界の両面につながりを持ちつつ微力を尽くす喜びを感じているのである。

銭幣館の助手を勤めていた15年間，私が館主田中啓文先生から受けたご指導は言葉に尽くせぬものがあるが，その中で私が終生身につけていきたいと思っていることがある。先生は「永年の体験だが，どんな人からも教わるものがあることを忘れてはいけない。人に接し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

て，いつもこの点を念頭に入れていれば必ず得るところがあり，それが自分自身の大きな蓄積になる」と繰り返し諭され，ある時の如きは「この考察は某が何気なく語ったことからヒントを得たものだ」と具体的に説明されたこともあった。先生のお言葉は私に謙虚さを教えられたものと思っていたのであるが，とかく理窟の多い私が不思議な位このことだけは素直に従えて，その後自分自身も思い当たることが多く，いつしか自分の身にも定着し，人と接するどんな時にも対手の言動の 中から 何かを 吸収しようとする 自分にはっとすることがある。しかもそのことは全く予期せぬ専門外の人と接する場合にもあって，私はこのことを先生から頂いた最高の教えと思っているのである。銭幣館から日本銀行に移って36年，ここでも私は種々の分野にある数知れぬ多くの人々に接する機会を許され，多くの新しい知識を受けたのである。本図鑑の上にこれが十分表現できれば田中先生のご薫陶にむくいられると思っている。

貨幣史は社会生活のあらゆる分野に深い関連を持つものであるから，真の貨幣史は多角的な視野に立って捉えねば実態を摑むことはできない。もし許されるならば，もっと多くの人から教えられ，経済学・社会学・民俗学などばかりでなく，金属学や技術部門の方々などと共同して将来未解決なものの究明をはかりたいというのが私の多年の願いなのである。

なお本図鑑の作成にあたり，既刊の図録の印刷に再検討を行ない，凸版印刷の製版部の方方には並々ならぬ苦労をおかけしたが，幸い図録と比較して遜色のない出来栄えとなったことは何よりのことであった。

また私の初めての試みである本図鑑に対し，永年にわたって学問的ご指導を賜わっている山口和雄先生ならびに江口英一日本銀行金融研究局長よりの推薦のお言葉をもって巻頭を飾って頂けたことは望外の喜びであり，心からの感謝を捧げさせて頂きたい。

終わりに，図録編集中親しくして頂いた東洋経済新報社の山口正，中川真一郎の両氏には今回重ねて多大なお骨折りを頂いた。これまた大きな謝意を表したい。

昭和56年7月

●凡　例

1. 本図鑑には貨幣819点，紙幣451点を収録した。図版は貨幣編・紙幣編に分け，それぞれ発行年代順を追って配列した。
2. 収録図版の寸法は以下のとおりである。

	図版番号	寸法
貨幣	1～819	実物大
紙幣	820～1056	実物の5/10
	1057～1202	実物の7/10
	1203～1270	実物の5/10

3. 表記は当用漢字・現代かなづかいを原則としたが，一部では貨幣・紙幣の実物に即して旧字体を使用した。
4. 付表 日本通貨一覧，貨幣索引については，それぞれの凡例を参照されたい。

日本貨幣図鑑 目次

●推薦のことば

●本書の刊行によせて

●序　言

●凡　例

図　　版……1

貨　幣　編……1

紙　幣　編……93

図　版　解　説……181

貨　幣　編……183

紙　幣　編……270

付表 日本通貨一覧……307

貨　幣　索　引……325

図版目次

貨　幣〔1～819〕

和同開珎
1～4　銀　銭
5～15　銅　銭
萬年通寶　16～19
開基勝寶　20・21
神功開寶　22～27
隆平永寶　28～32
富壽神寶　33～37
承和昌寶　38～40
長年大寶　41・42
饒益神寶　43～45
貞觀永寶　46～48
寛平大寶　49～52
延喜通寶　53～55
乾元大寶　56～59

海外渡来銭
唐朝銭
60　開元通寶
61　大暦元寶
62　開元通寶
宋朝銭
63　宋通元寶
64　元豐通寶
65　政和通寶
66　宣和元寶
南宋銭
67　建炎通寶
68　嘉定通寶
金朝銭
69　正隆元寶
70　大定通寶
元朝銭
71　至元通寶
72　至正通寶
明朝銭
73　大中通寶
74　洪武通寶
75　永樂通寶
朝鮮銭
76　東國通寶
77　海東通寶
78　三韓重寶
79　朝鮮通寶
80　常平通寶
安南銭
81　大平興寶
82　大治元寶
83　延寧通寶
84　永壽通寶

本邦模鋳銭
85　開元通寶
86　紹興元寶
87　延寧通寶
88　天聖元寶
89　景德元寶
90　治平通寶
91　元豐通寶
92　皇宋通寶
93　元祐通寶
94　洪武通寶
95　祥符通寶
96　元祐通寶
97～99　洪武通寶
100　平安通寶
101　元通通寶
102　永樂通寶
103　開元平寶
104　元平元寶
105　正元通寶
106　和開珎寶
107　元化元寶
108～111　永樂通寶

古鋳金錠
112　蛭藻金
113　讓葉金
114　角形金
115　菊桐金錠
116　竹流金

古鋳銀錠
117・118　石州銀
119　御公用銀
120　山口天又銀
121　八福丁銀
122　博多御公用銀
123　くくり袴大黒丁銀
124　古豆板銀

太閤分銅金　125～129
太閤圓歩金　130
天正越座金　131
天正大判　132～136
甲州金
137・138　露一両金
139　二分一朱金
140　角一分金
141　甲一分金
142　一分朱中糸目金
143　古鋳二分金
144～148　古鋳一分金
149　三朱金
150　二朱金
151　一朱金
152　朱中金
153　角朱中金
154　糸目金
155　甲下安一分金
156　甲安今吹朱中金
157　甲中安一分金
158　甲安今吹一分金
159　甲重一分金
160　甲重朱中金
161・162　甲重角朱中金
163　甲定一分金
164　甲定一朱金
165　甲定角朱中金

武藏墨書小判　166・167
駿河墨書小判　168
慶長古鑄小判　169
額一分金　170・171
慶長大判　172～174
慶長小判　175～177
慶長一分金　178～180
慶長丁銀　181・182
慶長豆板銀　183～185
慶長澤瀉丁銀　186

地方切銀
187・188　出羽窪田銀
189　出羽院内銀
190　出羽野代銀
191　出羽湯澤銀
192　出羽湯澤拾三銀
193　出羽横手銀
194　出羽角館銀
195　出羽秋田新田銀
196　加賀次の字銀
197　越後寛字銀
198　越後榮字銀
199　越後高田大德字銀
200　越後柏崎永字銀
201　佐渡德通印銀
202　津輕弘前銀
203・204　因幡甚兵衛銀
205　出雲木瓜銀
206　豐前小倉平田銀
207　長門山口余銀
208　伯耆常是銀

加賀小判　209～212
加賀花降一枚銀　213
加賀花降百目銀　214
元祿大判　215
元祿小判　216
元祿一分金　217
元祿二朱金　218
元祿丁銀　219・220
元祿豆板銀　221～227
寶永二ツ宝丁銀　228・229
寶永二ツ宝豆板銀　230～235
寶永永字丁銀　236
寶永永字豆板銀　237
寶永三ツ宝丁銀　238
寶永三ツ宝豆板銀　239～243
寶永四ツ宝丁銀　244・245
寶永四ツ宝豆板銀　246
寶永小判　247
寶永一分金　248
寶永佐渡小判　249・250
正德小判　251・252
正德一分金　253・254
正德佐渡小判　255
正德佐渡一分金　256
正德丁銀　257・258
正德豆板銀　259～261
享保大判　262・263
元文小判　264・265
元文一分金　266
元文丁銀　267・268
元文豆板銀　269～276
明和五匁銀　277
明和南鐐二朱銀　278・279
文政眞文二分金　280
文政小判　281・282
文政一分金　283
文政丁銀　284・285
文政豆板銀　286～294
文政南鐐二朱銀　295
文政一朱金　296
文政草文二分金　297
文政南鐐一朱銀　298
天保二朱金　299
天保五兩判　300
天保小判　301・302
天保一分金　303
天保丁銀　304・305
天保豆板銀　306～312
天保一分銀　313・314
天保大判　315・316
嘉永一朱銀　317
安政二分金　318
安政一分金　319
安政小判　320・321
安政丁銀　322・323
安政豆板銀　324～327
安政二朱銀　328
安政一分銀　329
三分通用メキシコ銀貨　330・331
萬延大判　332・333
萬延小判　334・335
萬延一分金　336
萬延二分金　337
萬延二朱金　338
貨幣司二分金　339
貨幣司一分銀　340
貨幣司一朱銀　341
慶長通寶　342～344
元和通寶　345～347
寛永通寶
348～354　初期水戸所鋳銭
355・356　寛永13年江戸所鋳銭
357・358　寛永13年近江坂本所鋳銭
359～361　寛永期鋳地不知銭
362～364　寛永14年水戸所鋳銭
365～367　寛永14年仙台領所鋳銭
368・369　寛永14年三河吉田所鋳銭
370・371　寛永14年越後高田所鋳銭
372～374　寛永14年備前岡山所鋳銭
375～377　寛永14年長門赤村所鋳銭
378・379　寛永14年信濃松本所鋳銭
380・381　寛永16年駿河井之宮所鋳銭
382・383　明暦2年江戸鳥越所鋳銭
384・385　明暦2年駿河沓谷所鋳銭
386～389　寛永～明暦期鋳地不知銭
390・391　寛文8年江戸所鋳銭
392　延宝元年江戸所鋳銭
393～395　元禄～宝永江戸・京都所鋳銭
396　正德江戸亀戸所鋳銭
397～399　正德・享保佐渡所鋳銭

400　享保江戸十万坪所鋳銭
401　享保京都七条所鋳銭
402～405　享保陸奥仙台所鋳銭
406・407　享保摂津難波所鋳銭
408～412　元文江戸十万坪所鋳銭
413　元文山城横大路所鋳銭
414・415　元文山城伏見所鋳銭
416～421　元文江戸小梅所鋳銭
422～426　元文紀伊中之島所鋳銭
427～429　元文下野日光所鋳銭
430・431　元文江戸亀戸所鋳銭
432・433　元文出羽秋田所鋳銭
434・435　元文摂津加島所鋳銭
436　元文江戸柳島所鋳銭
437・438　元文江戸深川平野新田所鋳銭
439・440　元文相模藤沢・吉田島所鋳銭
441～443　元文江戸小名木川所鋳銭
444～446　元文摂津高津新地所鋳銭
447・448　寛保下野足尾所鋳銭
449～453　寛保肥前長崎所鋳銭
454～457　元文佐渡相川所鋳銭
458・459　明和2年江戸亀戸所鋳銭
460・461　明和甲斐飯田所鋳銭
462　明和山城伏見所鋳銭
463　明和肥前長崎所鋳銭
464・465　明和5年江戸亀戸所鋳銭
466～468　明和～安永常陸太田所鋳銭
469～471　明和陸奥仙台所鋳銭
472～474　明和佐渡相川所鋳銭
475　天保6年江戸洲崎所鋳銭
476　天保9年陸前石巻所鋳銭
477・478　弘化元年常陸水戸所鋳銭
479　安政6年武蔵小菅所鋳銭
480・481　安政7年仙台所鋳銭
482　文久2年佐渡所鋳銭
483・484　江戸末期東北方面所鋳銭

寛永通寶(四文銭)
485～488　明和江戸十万坪所鋳銭
489・490　文政江戸十万坪所鋳銭
491・492　安政4年江戸浅草所鋳銭
493～495　万延元年江戸所鋳銭
496～498　慶応元年水戸所鋳銭
499～501　慶応2年会津藩邸所鋳銭
502～506　慶応4年津藩邸所鋳銭
507～509　慶応2年陸前石巻所鋳銭
510・511　慶応3年安芸所鋳銭
512～516　慶応2年陸中大迫所鋳銭
517・518　慶応3年陸中栗林所鋳銭
519　慶応4年陸中築川所鋳銭
520・521　陸奥浄法寺所鋳銭
522　江戸末期東北方面所鋳銭
523　明治元年本所小梅所鋳銭
524・525　下田管内通用銭

寶永通寶　526・527
天保通寶　528～530
文久永寶　531～533

江戸期地方貨幣
534～536　仙臺通寶
537　仙臺小槌銀
538～540　箱館通寶
541　盛岡銅山銭
542・543　水戸虎銭
544　水戸大黒銭
545～547　秋田封銀
548　秋田一兩判
549　秋田二分判
550　秋田二朱判
551・552　秋田一分銀
553　銅山至寶(百文)
554　銅山至宝(五十文)
555　秋田波銭
556・557　秋田鍔銭
558　銅山通寶
559～562　琉球通寶
563・564　米澤鉛銭
565　細倉當百銭
566　栗林虎銭
567　栗林大黒銭
568・569　文久貨泉
570　鐵山通寶
571　千貫通寶
572　盛岡八匁銀判
573～575　會津銀判
576　佐刕金山銭
577～579　天保通寶(水戸所鋳銭)
580　天保通寶(会津所鋳銭)
581・582　天保通寶(仙台所鋳銭)
583・584　天保通寶(盛岡所鋳銭)
585　天保通寶(旧佐渡所鋳銭)
586　天保通寶(秋田所鋳銭)
587　天保通寶(旧土佐所鋳銭)
588・589　天保通寶(鹿児島所鋳銭)
590～594　天保通寶(鋳地不知銭)
595～597　但馬南鐐
598　加賀南鐐
599～600　一分銀
601　庄内一分銀
602～615　鉛切手銭

往古銀　616
寶永正字丁銀　617
長崎貿易銭
618～621　元豐通寶
622　祥符元寶
623　天聖元寶
624　嘉祐通寶
625・626　熙寧元寶
627　紹聖元寶

沖縄貨幣
628　中山通寶
629・630　鳩目銭
631～633　鑄寫銭
634　封印銭

銭貨母型類
彫母銭

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com